

## ワークショップ 「装いと規範」

日時：2018年2月10日（土）13:00-17:00

場所：京都大学東南アジア地域研究研究所 稲盛財団記念館2階213号室（セミナー室）

<https://ciras.cseas.kyoto-u.ac.jp/access/>

趣旨：

装いは、価値観や信念、思想、規範など、目には見えないものを映し出す鏡である。その時々  
のファッション（流行の装い）に目を向けたとき、我々は、それぞれの時代の人々が、どの  
ような美意識を持ち、何を大切にしていたのか、そして、どのような枠組みの中に生きてい  
たのか、その一端を知ることができる。本ワークショップでは、現代のイスラーム圏におけ  
る複数の事例を通して、装いから何が見えてくるのか、「現代」「イスラーム」という共通項  
がどのような意味をもつのかを検討していく。

プログラム：

司会：村上薫（アジア経済研究所）

13:00-13:10 趣旨説明 帯谷知可（京都大学）

13:10-14:00 報告1

後藤絵美（東京大学）「ニカブをまとうまで—現代イスラームにおける「自己選択」の  
諸相」

14:00-14:50 報告2

帯谷知可「ルモルとヒジョブの境界—社会主義的世俗主義を経たイスラーム・ヴェール問  
題」

14:50-15:00 コーヒーブレイク

15:00-15:50 報告3

野中葉（慶応大学）「インドネシアにおけるハラール化粧品の隆盛と女性たちの美意識」

15:50-16:10 コメント

粕谷元（日本大学）

和崎聖日（中部大学）

16:10-17:00 ディスカッション

主催：新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて」（グローバル関係学）  
研究計画 B01「規範とアイデンティティ」

京都大学東南アジア地域研究研究所 CIRAS 共同研究個別ユニット「社会主義を経たイスラ  
ーム地域のジェンダー・家族・モダニティ」

共催：京都大学東南アジア地域研究研究所環太平洋研究ハブ形成プロジェクト、同 CIRAS 共同  
研究複合ユニット「秩序再編の地域連関」、個別ユニット「体制転換過程の比較研究」

## 報告要旨 1

### 「ニカーブをまとうまで—現代イスラームにおける「自己選択」の諸相」

後藤絵美

(東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク、東洋文化研究所)

本報告でとりあげる「ニカーブ niqāb」は、宗教的な意味を含みもつムスリム女性の顔覆いである。一枚から数枚の黒い布でできたものが一般的であり、現在、中東や東南アジア、欧米を含む世界各地の女性のあいだで用いられている。2010年代にヨーロッパやアフリカの一部で、公的な場所でのニカーブ着用が禁止されたり、禁止が検討されたりして話題になったが、ニカーブ着用者の増加という現象は、その数十年前からムスリムが多数派を占める国々でも問題視されてきた。本報告で取り上げるエジプトの文脈においても、顔や表情を覆い隠すニカーブの着用は、しばしば、女性抑圧の象徴といわれたり、過激なイスラーム運動と結びつけられたり、狂信性や無知と関連づけられてきたりしてきた。

一方、本報告が注目するのは、こうした言説の中にありながらも、自らの意思でニカーブをまとったと述べる女性たちである。その際、報告者が2000年代前半のカイロで知り合ったあるエジプト人女性を例として、その「自己選択」を支えたものが何であったのかを検討する。彼女は26歳の時、ニカーブをまといはじめた。そのきっかけとされたのが、ムハンマド・ハッサーン(1962-)というエジプト人サラフ主義説教師による説教『ムスリム女性のヒジャーブ』であった。夫の留守中に、家で説教の録音を繰り返し聞いた彼女は、ある日「納得した」と言ってニカーブをまとい始めたという。

本報告では、自己選択をめぐる彼女の物語を軸に、現代のムスリム女性を取り巻く複数の枠組みを浮かび上がらせていく。メディア状況の変化、サラフ主義の興隆、その言説の浸透。とくに最後の点に関しては、説教『ムスリム女性のヒジャーブ』の内容分析を行う中で、ニカーブ着用を「規範」とする宗教言説の構造の一端を明らかにする。また、それを支えている「権威の連なり」とも呼びうる関係性の存在についても論じてみたい。

## 報告要旨 2

### 「ルモルとヒジョブの境界—社会主義的世俗主義を経たイスラーム・ヴェール問題」

帯谷知可

(京都大学東南アジア地域研究研究所)

本報告が対象とするウズベキスタンは、1991年にソ連から独立した中央アジアの一国であり、ここではポスト社会主義、イスラーム復興、権威主義が交錯する磁場で20世紀的モダニティの見直しともいえるべき諸問題が生じている。

ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール問題とは、2000年代に入った頃から「ヒジョブ hi job」と呼ばれた、ウズベキスタンで歴史的に見られたのとは異なる新しいスタイルのスカーフ着用を含むイスラーム式服装が女性の間で急増したこと、そして政権側がそれを容認せず、2012年頃から統制が厳格化し、2015年にはヒジョブの販売者・着用者が広く摘発されるに至ったものである。この統制のロジックは表面的には世俗主義とあらゆる宗教の平等を理由とするものだが、その背後にはイスラーム過激主義への過度の懸念・警戒があり、ウズベキスタン国民の中にいたずらに「他者」を作り出すことにもつながりかねないという報告者は考えている。

ウズベキスタンでは独立以降、公の言説として「よいイスラーム」（ウズベキスタンの伝統的な信仰）と「悪いイスラーム」（外来の過激主義を含む信仰）が明確に線引きされてきたことは多くの研究者が指摘してきたが、ソ連時代に行われたイスラーム・ヴェール根絶運動を背景に、女性のスカーフをめぐる「よいヴェール（ルモル）」と「悪いヴェール（ヒジョブ）」という二分法が存在していることが観察できる。そこで本報告では、「よいヴェール」としての「ルモル」に着目し、20世紀的モダニティの中でいかにルモルが「よいヴェール」になったのかを確認しつつ、ルモルとヒジョブとの境界とは何か、またそれが意味することとは何かについての検討を通じて、女性の服装をめぐる現代ウズベキスタンのナショナルな規範のありようについて考えてみたい。

### 報告要旨 3

## 「インドネシアにおけるハラール化粧品の隆盛と女性たちの美意識」

野中葉

(慶應義塾大学総合政策学部)

本報告は、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアで、昨今、多くの女性たちに好んで使われるようになったハラール化粧品を取り上げる。情報と流行に敏感な 20 代から 40 代前後の都市部に暮らす女性たちを主な読者層とする書籍や雑誌の記述をもとに、化粧品やメイクに対するイスラーム的言説を分析し、またハラール化粧品が女性たちの認知と人気を集めるようになった過程および女性たちの意識を彼女たちへのインタビューなどを通じて明らかにする。

女性たちに読まれている書籍や雑誌の記述によれば、イスラームの教えでは、人間の外見を変形させること、装飾品などで華美に目立つこと、行き過ぎは禁じられているものの、きれいな衣服を着用することは推奨されている。また、ナジュス（不浄）については、体に付着したまま礼拝をすると礼拝が無効になるとされる。こうしたイスラームの教えの解釈により、昨今のインドネシアの特に若年層の女性たちの間では、ナジュスの含まれる製品は避けようとする姿勢が強まっている一方、メイクすることそれ自体は、行き過ぎなければ許容される、という意識が主流である。

ここ 30 年～40 年ほどで、インドネシア社会のイスラーム受容の様子は大きく変化した。1960 年代後半から 1998 年まで 30 年以上にわたり継続したスハルト大統領による長期権威主義体制下では、政治的なイスラーム運動は厳しく制限され、また公立学校でのヴェール着用が禁止されるなど人々のイスラーム実践にも制約が課される時期が続いた。1998 年に民主化して以降、社会の様々な側面でイスラームが顕在化するようになり、またイスラーム的であることの方がそうでないことよりも良い、という価値観も急速に広まっている。ハラール化粧品が認知と人気を集めるようになったことも、こうした社会の変容と不可分であり、化粧品の使用やメイクの実践においても、イスラーム的「規範」が強く意識されるようになっている。

インタビューでは、以前には外国製の化粧品を使っていた人たち、また以前にはメイクはイスラームの教えに背くと考えていたイスラーム運動に参加してきた女性たちの双方が、現在、ハラール化粧品の使用者になっていることが明らかになった。またハラール認証は一定の支持を得ているものの、認証マークがなかったとしても、製品のハラール性を自らが納得できさえすれば、多くの人たちが使用することも確認された。